

佑啓

ゆうけい

発行者
 社会福祉法人 佑啓会
 理事長 里見 吉英
 〒290-0265
 千葉県市原市今富 1110-1
 TEL 0436-36-7611
 FAX 0436-36-7612
 編集者 広報委員会

懐かしさ

堀口 貴宏

「三十周年を迎えるにあたり、佑啓に寄稿してほしい」理事長のご子息、吉佑さんから話を頂いた。私のこれまでの社会人生活はほぼその年月にならなっています。

ふる里学舎でお世話になったのは大学を卒業して八年ほど。市原市今富の地に施設が開所して、三年目の入職でした。

時が経つのは早いもので、その当時、まだ小学生ぐらいだった吉佑さんとも、いつからか、法人においても業界においても、一緒に仕事をすることがなくなりました。人の縁とは不思議なものです。あのとき、声をかけて頂いたことから今が繋がるなんて、その当時は考える由もありませんでした。

第123号

啓

機関紙

いまでも、ふと、ひとりになると、あの頃の日々の様子が、まざまざと蘇ってまいります。

大学卒業間近に迫った平成七年二月、三股先生の案内で施設見学したのが、ふる里学舎との出会いでした。一月に阪神大震災、三月に地下鉄サリン事件、世の中が騒がしかったことを覚えています。当時は人生で何をしたらいいか分からなかったし、大学に通っ

てもやりたいことが見つからず、両親が蓄えたお金をひたすら浪費しているだけでした。就職活動もせず、フリーターでも何とかなると思っていました。

そんなバカ息子に見兼ねた父が、「おまえ、将来どうするんだ。何も決まってるなら、ここにも顔をだしてこい」と怒られ、渋々行った場所が、その当時の厚労省の職員や県内の施設長さん方が意見交換する宴席の場でありました。何もしゃべらず、分不相応な座敷の末席に座っていた学生に「よかつたら一度見学に来てみないか」と声をかけていただいたのが里見先生でした。

車から降り、門のところまで歩いては車に戻り、車内でタバコをくゆらせる。なにせ、福祉施設に行くのはほぼ初めて。知的障害という、まるっきり自分の知らない世界に不安を抱いたことは確かでした。

普通の人の感覚とはそのようなものかもしれません。未知なるものへの好奇心と不安は密接に繋がっているのでしょうか。

三回ほど行ったたり来たりして、腹をくくって見学後、「次回は親と

一緒に来てほしい」と言われ、一週間後、理事長室のソファに父子で座っていました。

「給料はいらない。便所掃除だけさせてくれ。こいつに働くことの意味を教えてやってほしい」父の言葉に、「えっ！」心の声が漏れるくらいびくくりしました。が、黙っているしかありません。無給で便所掃除とは。多少は迷いましたが(厚顔無恥ですみません)、お世話になることを決めました。今振り返ると、自分が人生で下したもっとも正しい判断だったと思います。



平成7年職員旅行～猿ヶ京温泉
(上段左から2番目が堀口氏)

入職し、辞令には農芸科という文字。障害の重い人たちの担当でありました。これから、なんの知識も経験もない青年が苦労するのは、想像に難くないでしょう。

初めて障害者と接して、コミュニケーション手段としての言葉がない人、あつてもその言葉自体に意味を持たないときもあり、とても困惑したことを覚えています。知的障害という障害の特性上、自分たちの意見を訴えづらいという

面があり、文字などでも伝えることができない人も多く、様々な点でハンデがありました。

それをわかってやれるのが職員だろう、と言われるかもしれせん。しかしちよつとした仕事、表情や行動から彼らの気持ちを汲み取るようにしていました。難しい面があったのも事実です。障害の重い人ほど、この現実には深刻なものでありました。

それでも、月日が解決してくれた面もあり、いつしか慕ってくれる方も増え、柔らかな表情を浮かべてくれるだけで、うれしかった気がします。利用者も私のことがわかってきて、次第に落ち着いた表情を見せてくれました。

ある程度の時間を一緒に過ごすことで、人との距離は縮まります。結局は、人同士の付き合いだということに、改めて気付かされました。このことは、今の私の仕事にも通じています。

それからは、ミカンの管理や、シイタケの収穫に追われる日々。自分は支援員なのか、ミカンやシイタケの世話係りなのかわからないう。手にした感覚で、小袋にシイタケ三百グラムを仕分けられる頃には、爪の先端がシイタケの肉で真っ黒になっていました。

環境整備もよくやりました。竹やぶや湿地帯など、荒地地に飛び込み、開拓に勤しみました。もちろん、お酒も付き物です。あの厳しく、忙しい日々の中でも、職員が明るく、生き生きと働いていたことを思い起こします。それでも本当に楽しい日々でした。

今とは違い、事業が始まったばかりのころです。私なんかは窺い

知ることのできない困難、苦労が、沢山あったことでしょう。

それでもとにかく、情熱をもち、努力し、行動していくなかで、道を選び、ひたすら歩み続ける幹部の姿に引つけられ、なんとか後を追いかけることができたように思います。

失敗したら、二度と同じ失敗をしないように、どうやったらいいのかが、その場で考える。そして考えたなら、酒でも飲んで、騒いで忘れる。次の日にはすっぱり忘れる。また、新しいことにチャレンジする。

こうした一連の光景に、佑啓会らしき、が凝縮されている気がします。



一泊研修～秩父長瀨 (左から4番目)

私はいま、保育園の園長として働いています。

待機児童問題が騒がれ、さらなる保育園建設に奔走していたころ、遅々として進まない建設用地の取得、二転三転したうえ、新たな土地に案内されたとき、反対側の風景に突如、目を奪われました。ふる里学舎の景色が、急によみがえってきたのです。

「周囲に家がなく大丈夫か」多くの人に心配されましたが、

無我夢中で地権者宅を回り、自分の直感を信じ、開園まで漕ぎつけることができました。

園名は「さとの保育園」。

隣地はミカン畑。今では、多くの方から、入園を希望される保育園になりました。



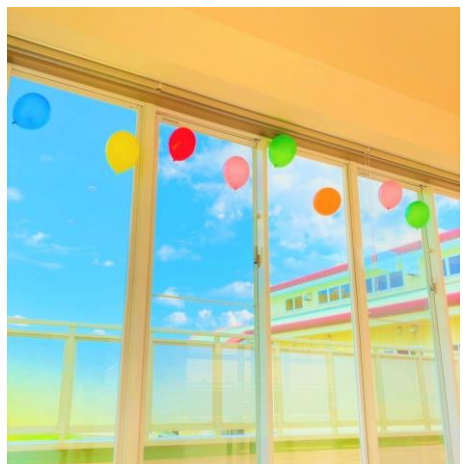
「さとの保育園」

今の私があるのも、里見理事長はじめ職員の皆さまのご指導とご支援があったからだ、心から深く感謝とお礼を申し上げます。

いつまでも、人間の情感あふれる職場でいてほしいと願っております。

創立三十周年、誠におめでとうございます。

社会福祉法人長須賀保育園
 法人本部長
 社会福祉法人佑啓会 監事



お世話になって

二十八年経ちました

古巻 高明

通所でお世話になっております古巻宏美の父親です。原稿の執筆依頼を受けましたが、何を書けばよいのかよく分かりませんでした。娘との関わりや家族会活動について少しだけ述べさせてもらいたいと思います。

娘は市原養護学校(今の特別支援学校)の卒業と同時に、ふる里学舎の通所の方でお世話になることになりました。当時は開所二年目で利用者は二十人位だったと思います。その時の職員の方々は、今各施設の施設長で活躍されております。

私はそれまでは仕事の忙しさを口実に、学校行事等の参加はほとんどを妻任せで、何ひとつ子供のことに関して理解をしておりませんでした。しかし、これから先の事を考えた時、これではいけないと考え通所をしたのを機にいろいろな行事に参加させてもらうようになり、子供のことも少しずつではありますが見えてくるようになりました。

最初の行事への参加は新年会・成人式です。家族でしか祝ってやれないと思っておりましたので、五井グランドホテルで見里理事長をはじめ、職員の方や保護者の方々に祝福された時には涙が出るくらい嬉しかったのを今でも鮮明に覚えております。

成人式保護者代表挨拶をさせて頂きました。昔の事が走馬灯のように頭の中を駆け巡りました。娘は言葉が発する時期になってもそのような兆候はなく、心配で何か所もの病院へ行き、精密検査を受けました。しかしどこも異常はなく、少し言葉の発生が遅れているとの説明で「言語遅延」という病名だったことを覚えております。

その娘が今では毎日楽しく「学舎へ行く」と出かけております。喜んで出かける姿を観たとき、親としては指導をして頂いている職員

の皆さんには感謝の言葉しか見当りませんでした。本当にありがとうございました。娘は唯一の部下である私にいろいろな指示をしてくれます。「アイスを買ってきて」とか「ドライブ行こう」です。

毎日指示を受けているのが「洗濯物たたく」です。学舎でタオルたたくのお手伝いをさせてもらっている関係だと思えますが、自分で洗濯物を取り込んでからたたんでカゴに入れます。そこからもう一度私にきれいにたたみ直しを命じるのです。母親が手を出すと怒ります。

娘のこだわりで洗濯物をたたみ直す仕事は父親の役目なのです。

また、車で出かけることが大好きなので月に二〜三回ほどドライブに出かけております。主に房総方面の道の駅巡りで、昼前から夕方五時くらいまで買い物やトイレ休憩をしながら、楽しそうにおしゃべりしたり、CDを聞きながら歌を口ずさんだりしております。これからも体が健康でいる間はいろいろな所につれて行き、思い出として残せたらと思っております。



ドライブ先での1枚

次に家族会活動について述べさせていただきます。

私が家族会行事に初めて参加したのが前述の通り娘の新年会・成人式が始まりました。

何回かの行事に参加するようになった頃、渡部家族会元会長(故人)より役員への就任要請をいただき、監査役でお世話になることになりました。それが始まりで役員期間は今年で

おおよそ二十六年くらいになるのではと思いますが、あまりにも長いので定かではありません。役員を引き受けて今日まで様々な家族会活動がありました。主な行事として環境整備、作品展のお手伝い、研修旅行への参加、講演会への参加等々です。



家族会一泊研修旅行懇親会の様子

変わった行事として大変だったのが、演歌歌手の長山洋子さんを招いてのチャリティーコンサートを家族会主催で行った事です。私は田中さん(元役員)の依頼で荒井さん(元役員)とチケットの販売を任せられ、保護者の皆さん、親戚、知人、会社関係にお願いして売り歩いた記憶があります。その当時一枚幾らだったかは覚えておりませんが、何とか目標とする枚数を売り上げたことを覚えております。

コンサート当日は早朝から市原市民会館に向き、駐車場に臨時のライン引きを行い、作業終了後は来場者の誘導等、コンサートを観る事は出来ずじまいでしたが、多少なりとも学舎に寄付をさせて頂くことが出来ましたので、苦労はしましたが大変良い経験をさせて頂きました。

コロナ禍の今日では学舎行事、家族会行事は実施できず、利用者の皆さんには我慢の日々が続いております。その中にもあっても利用者中心の考えの基、いろいろな計画を立てられ、それらを実行されている職員の皆様に心より感謝を申し上げ、引き続きのお力添えをお願い申し上げます。(ふる里学舎通所 保護者)

「変化」

米窪 佳那子

季節の変わり目を匂いで感じるころがある。とりわけ私は冬の香りが好きで、秋の穏やかさに鈍くツンとする香りが混じると心が躍る。

変化というのはいつだって微弱なもの、その違いを見つけてるのは稀である。佑啓会で働いて四年。非日常的なことが多い職場では、いつだって自分の中に変化があったが、いざ振り返ると見つけづらなものだ。四年前、入職当時に佑啓会を見たときは、この環境になじめるか不安だった。今まで過ごしていたものと

は違い、明るくて陽気で、確実性や積極性を求められる空間。内弁慶な私は、利用者にまで人見知りをしてしま、周りには大変な迷惑をかけたことだろう。誰よりも気持ちは負けていない自信があるのに、それを表に出すことが出来ない。消極的でネガティブな自分がずっと大嫌いだ。自分の殻を、ずっと破りたかった。



オリンピックトーチと農耕科職員！

きっかけは、もう分からなくなってしまう。一年目の終り頃、職員室で一緒に仕事をしている職員に声をかけることができた。二年目にはプライベートでお酒を飲みながらくだらない話ができる仲間ができた。三年目、自分から遊びたい相手を誘えるようになった。そして今は毎日笑って仕事ができるようになった。

先日、大学時代の友人と仕事の話をする機会があったが、どうもこの法人は、職員向けの行事が多いらしい。ずっと対人関係の仕事だからだと思っていたが、教職の人も放課後等デイサービスをしている人も驚いていた。今は慣れてしまっている自分も、確かに入社当時は驚いていたかもしれない。煩わしく思っていたかもしれない。でも、そのおかげで今の私があると断言出来る。きっと職員同士の関わりが少ない企業にいたら、自ら行動できず、今も私が嫌いな姿でいたことだろう。その背中を押してくれたのは、変わるきっかけをくれたのは、紛れもない佑啓会だったのだ。

新人の頃、佑啓に寄稿したことがある。「夢」というタイトルで、佑啓会での挑戦を志した文章だった。佑啓会の職員は、変わらずいつだって楽しむ姿勢を忘れず、何をやるにも全力だった。私も四年間、同じようにむしやりに利用者に向き合ってきた。楽しい思い出もあるが、人というのは苦しんだ時の方が心に残るものだ。

辛くて苦しくて、それでも今立ち上がって向き合えるのは、そのことに対して悔いがないからだろう。失敗もしてきた。でも自分の最大限の力を出した失敗は、不思議なことには晴れやかな気持ちが残る。そうして生まれた失敗は、これからの私に生きていく。それが分かっているから失敗は怖くない。全力を出せる環境があるから、失敗から学ぶことができる。そうして社会人として成長してきた。

全力を尽くすのは気持ちがいい。だからこそ、最近よく考えることがある。私が正しいと思ってるのは、不利になることもある。客観的に見て正しいことが、必ずしも正解とは限らない。そして、全力を尽くすということ、誰かの正義とぶつかるといふこと。きつと真剣に向き合っている人ほど、衝突が増えていくのだらう。その衝突を避けようと、自分を押し殺す人も少なくない。主張を恐れる人を不思議に思っていた

が、押し殺すことも強さの一つだと学んだ。しかしどんな正義であれ、それがぶつかり合うことは、良くも悪くも何かを生み出す力がある。主張できることも強さだと信じて、私は今日も声をあげる。



法人内バレー チーム市原！

佑啓会は、今年三十周年を迎える。きつとこの三十年、佑啓会の職員はみな全力でぶつかり合ってきたのだらう。そうして生まれた力で変化を繰り返して、今の佑啓会がある。そして、これからの時代を創る私たちがその思いを継いでいく。

五年後、十年後、どんな姿になっているだろうか。自分らしさを出し切って、その先に見えるものを見てみたい。だから私は、これからも正義から目をそらさずに生きていくのだ。

(ふる里学舎 支援員)

編集後記

年を重ねるごとに、季節の移り変わりが年々早く感じるようになってきました。気付いたらもうすぐ、新しい年度を迎えようとしています。

新年度は、新しい出会いが増え、様々な「縁」を感じる時期でもあります。今までの縁、新たな縁を大切にしていきたいながら、新年度を皆様と一緒に沢山の笑顔で迎えたいと思っております。

そんな想いを込めながら佑啓一三三号をお届けします。(主任 猪狩 宏恵)